

産地に期待される試験研究への取り組み

所長 和田年裕

近年の農業は、不況による消費の減退に加え輸入農産物増加による国産農産物市況への圧迫、また、担い手の減少、環境保全の対応、需要の多様化への対応等農業を振興する上で多くの課題を抱えています。暖地園芸センターは、これらの厳しい環境を踏まえながら、本県農業の振興と農家経営の安定のために、技術開発に取り組んでいます。

ウメの生産安定と今後の課題

昭和60年代始めから発生したウメの生育不良は、県産ウメが品質と生産量で全国1の地位にあるだけに大きな問題になっています。当センターでは、これまでの試験成績を踏まえ、ウメの持続的な安定生産技術を「ウメ栽培マニュアル」として冊子にまとめ、普及を図っています。今後さらに、ウメ樹の生理・生態に関する基礎データを積み上げつつ、適正な枝梢、結実管理技術や土壌管理法の確立、樹勢強化のための優良台木の選抜等に努めています。

一方、ウメにはポリフェノール類、クエン酸等発ガン抑制や動脈硬化を予防する機能性成分が多く含まれています。そこで、健康食品ブームの中で県産ウメの消費拡大を図るため、ウメの機能性成分の含有状況を明らかにし、成分含量の高い栽培法を検討することにしています。また、食品の原産地表示をにらみ、原産地の判別基準作りに関係機関と協力して取り組んでいます。

オリジナル品種の育成

近年、種苗法の改正で他所で育成された品種の扱いが厳正化され、自前の品種を持つ必要性が増しています。新品种の開発は当センターの重要な業務で、エンドウを始めとしてカスミソウ、スイートピー、小菊等の品種の育成に取り組んできました。



目下、自家和合性のウメ、節間の短いエンドウ、萎凋細菌病に強いスターチス、花色等の優れたスイートピー等の育成を目標として取り組んでいます。育成中の個体の中には、有望なものもみられ、品種登録に向けて特性検定等を実施しています。

また、育種には長い年月と労力、場所を要することから、将来に向けDNAマーカーを用いるなど先端技術を活用した効率的な育種手法の開発にも取り組んでいます。

環境に優しい養液栽培

農業にも、環境に配慮した生産活動が求められるようになり、各地域で環境保全型農業技術の開発に取り組んでいます。従来のかけ流し方式による養液栽培では環境負荷が大きいことから、バラ、スターチスについて循環式等の新しい装置の試作と培養液の濃度、組成、供給量等の検討を行っています。本技術は、環境負荷の低減と併せて生産コストの削減にもつながるものと考えています。

上記の他、露地及び簡易施設における花き周年生産の体系化、有機性廃物の有効利用、稀少植物の保護・増殖等にも取り組んでおり、得られた成果は速やかに情報として提供し地域で役立てて頂きたいと考えています。